

Ann. Rep. Asahikawa
Med. Coll.
1987. Vol.8. 57~64

19世紀ドイツの偉人変人

—その4 二つの遺書的なもの—

丸 子 基 夫

I. ある外科医の場合

下にかかげるのはドイツの ^{ビーダーマイアー}Biedermeier 期 (ほぼ1815—1848年) における外科の名人として、とくに輸血法・形成外科・腱切断の分野で功績をあげた ^{ディーフェンバッハ}J. F. Dieffenbach (1792—1847) 教授の、短いながら遺書ともいえる手紙である (宛名人不明)。

ポツダム, 19—10—1847

私の友人の幾人かは、私が25年前の今日ドクトル学位を取得したことを、あるいは忘れないで思い出したかもしれません。私がおそれるのは唯、彼らが同僚や知人のあいだにこの日のことを大袈裟に言いふらして、もし祝賀会でも開こうものなら、私はまるで窮地に追いこまれた気持になるでしょう。昔から私は、祝典の英雄になること、美辞麗句を浴びせられる賓客たることを、考えただけでもおぞましく辛い気になったものです。今日なども、どんな貴顕の方たちから祝辞を言われるよりも、むしろ何か手術をさせてもらいたいくらいです。これは単なる謙遜ではなくて、本当に私一人にとって大切なこの日に、静かに孤独でいたいという一種の憧れでもあるのです。病む人々のために私が職を奉じて生きてきた25年は、あたかもたったの25週の如く、あっという間に又満足のうちに過ぎてしまいましたが、私はこの多事多端 bewegt で、実に多くの苦しみ・悩みを見てきた ショッキング erschütternd な生涯において、心にも体にも些かの疲れも感じていません。私は共に生きた多くの患者のおかげで比類なく鍛えられ励まされたと信ずるものだから、あと更に25年続けて契約するつもりでいます。

それで本日10月19日、何人かの友人知己の方がたが、今から25年前の今日、かの秀れた故ドウトルボン先生によって私の頭にドクトル帽がのせられたことを耳にして、私の

ことを思い出して下さるのなら、私としてはその御厚情を全く静かに自分一人きりで味わいたいです。そして皆さんが私に示してくれたあらゆる好意、私の人生目標の達成に役立ったあらゆる善意に対して深謝したいと思うものです。

ヨーハン・フリードリヒ・ディーフェンバッハ

外科医はこのあと、ひと月もせぬ内に突然55歳で他界し、彼の「更なる25年の医業への契約」は果されなかった。もう半歳生きていたらドイツ三月革命という大事件にぶつかって、彼の人生は一そう bewegt (多事多端) となり、その人生観はあるいは逆に erschüttert (がっくり来た) になったかもしれない。

ディーフェンバッハはハイネやショーペンハウアーと殆ど同時代人であり、東プロイセンの大学町ケーニヒスベルクに牧師の子として育った。高校の上級生だった時にフランスに完敗したプロイセンの王家一族が同地に難を逃れてきて、1808年から2年間臨時政府がおかれ、改革派の首相シュタインや文部参議 W. フォン・フンボルトも活動したが、一般市民の注目の的だったのは才色兼備で国民にえらく人気のあった王妃ルイーゼ (1776~1810) の、この難局における気丈さだった。程なくケーニヒスベルクにも戦勝軍が進撃してきて、王家は冬の真中さらに東の涯の田舎町メーメルまで落ちのびねばならず、とくにナポレオンに対して敗戦の痛手を少しでも軽減しようとの外交工作が失敗に終わったこともあって、王妃の憔悴は甚だしかった。このとき王家の侍医でベルリンの Charité (総合病院) 首席医師たる碩学クリストフ・W・フーフェラント (1762—1836) が昼夜の別なく献身的にルイーゼ王妃を看護したことは有名な逸話であるが、これが牧師志望の敬虔な少年ディーフェンバッハの魂に及ぼした感化は少なくなかったであろうと思われる。

その後ケーニヒスベルクの神学部に入って父と同じ牧師への道を進んでいた青年は、1812年冬にナポレオン軍がロシヤから散を乱して潰走してきた時から、思いもかけぬ激動の (bewegt), 新しい生涯に突入することになる。年代記的にそれを追ってみれば:

- 1813—1814 21歳の神学生は義勇兵として祖国開放戦に加わり、長駆パリへ進撃。
- 1816—1822 ケーニヒスベルク大医学部に転じ、ついでボン大医学部へ。有名な外科医 Ph. フォン・ヴァルター教授につく。30歳で「再生と移植」の論文により博士号をとり、ベルリンにて開業。
- 1825 ⁽¹⁾パリに留学。王の侍医デュピュイトラン、聴診器発明者ラエンネクらの活躍にふれ、外科・内科・病理解剖の分野で深く啓発される。著書「輸血と血管内薬剤注入(1828)」。
- 1830 多くの外科手術で妙技を示し、指導医としてベルリン大付属病院

Charitéに入り、1832年に助教授となる。

- 1832—1832 猛威をふるったコレラ（後述）の治療に挺身する。
- 1834 著書「コレラ患者の生理学的病理学的所見」
- 1840 7月に死亡した K. F. フォン・Graefe^{グラーフェ}教授（鼻形成，切断術，白内障の権威）の後を継いでベルリオン大付属病院の外科主任教授となる。
- 1841—1842 著書「腱と筋の切断について」，「吃りの矯正」，「斜視について」。
- 1844—1849 主著「Die operative Chirurgie 2巻」，数カ国語に翻訳される。
- 1847 著書「苦痛に対するエーテル使用」。
- 1年前から米国や英国で話題になり始めた麻酔法をドイツに初めて導入する。
- 1847年11月11日，55歳にして急性肺炎で死亡。

「19世紀ラルース大百科」（1910年版）においてディーフェンバッハは「教授としてはパツとしなかつた médiocre が，手術医としては信じられない手腕 incroyable faculté の持主」と評されている。たしかに彼は先輩フーフェラントが国王の侍医であり，ゲーテ，シラー，ヴィーラントの友人であつたような社会的名士では全くないし，彼より若くてより早くベルリオン大教授となり，その門下からシュバーン，シュライデン，ヘルムホルツ，フィルヒョーらの英才を輩出し，ベルリオン大総長にまでなつたヨハネス・ペーター・ミュラーの如き大学者ともいえない。牧師たる道を進みながら，弁舌や社交性においては決して秀れていなかつたかもしれぬ。神学部なかばにして24歳で医業に転ずる決心をしたのは，おそらく少年時代と青年期に目撃し体験した二大戦争のむごさの故であろう。実際1807年2月のフランス対ロシア・プロシヤ連合軍の血戦が闘われ，二日間で5万の戦死者をだした Eylau 村は故郷の町から南へわずか40kmにすぎず，又自ら参戦した1813年10月のライプチヒ大会戦からモンマルトルの丘での決戦までの約5ヵ月に，彼は幾万もの死傷者の呻吟を見たことであろう。この手紙の入っている“Deutsche Menschen - Eine Folge von Briefen -” (1936) を編注した W. ベンヤミンは，外科医の謙虚さをむしろ「無名性への当然の権利」と呼び，この手紙集を編むに際しての選別の基準とした「ドイツ市民精神の一精華であるところの die Treue（信義，誠実）の偉大なる典型」だと評している。

ただし，ベンヤミン謂うところの，この「市民的信義の偉大なる典型」は私の見るところでは，単に Dieffenbach 個人の性格だけに由来するものではなさそうだ。敢て推測するならば，この一貫した反功名心，極端なまでの無名への憧れは，かの Max Weber

が“Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus (1905)”で大胆な仮説として展開した、カルヴィン主義を起源とする禁欲的なまでの「職業倫理」、つまり「毎日の仕事を神から定められた人生の自己目的と信じて、陰日向なく計画的に遂行する生活信条」の一表現ではなかろうか。ヴェーバーはこの《世界内的禁欲的勤労倫理》の系譜をカルヴィニズム→ピューリタニズム→ドイツの敬虔派（とくに東プロセインのメノナイト派）と連ねている。⁽²⁾ 外科医の父の牧師がどの派に所属していたかは私には分らぬけれども、神学生ヨーハン・フリードリヒが戦争体験を通じて牧師への道を放棄して、より直接的に病める人、傷ついた人を癒す天職（der Beruf = 神から berufen 召命されること）に進んだという契機のうちにも、又、上にかかげた手紙にも明らかな徹底した職業への帰依と自信、また隠者的な沈黙、孤独への強い憧れにもかかわらず、患者のための奉仕と勤勉を続けるという決意表明は、まさしく Weber がベンジャミン・フランクリン（1706—1790）に即して詳述した、あのプロテスタンチズムに発する「世俗内禁欲 inner weltliche Askese」から完全な発展をとげた『勤勉のエートス』に基づくものではなかろうか。蛇足ではあるが、名医の姓 Dieffenbach の語源はもちろん Tiefen - Bach 深い川である。

II. 詩人・植物学者シャミソー（1781—1838）の晩年

1830—31年に欧州で荒れ狂ったコレラ禍にちなんだ冗談詩「遺言状」

1830年7月パリで成功した市民的自由主義的の革命は同年10月のベルギー独立と11月のワルシャワ蜂起を導いたほかに、ベルリンでも仕立職人たちが待遇改善を求めて親方たちのギルドを脅かす騒ぎが一時もち上ったが、この時プロセインは西ポーランドにおける自国領土の治安を確保すべく、翌年グナイゼナウ元帥を司令官としクラウゼヴィッツを参謀長とする監視軍をポズナン市にはりつけ、ロシア軍に粉碎されて逃げてくる蜂起軍に大砲をあびせて東に追い返した。神聖同盟の一員たるプロイセンとしては当然の行動であったが、アストラハンで発生してロシア軍と共に西進してきたコレラ⁽³⁾は、1831年の夏と秋に司令官と参謀長を倒したばかりでなく、首都ベルリンに到ってその猛威は一段とひどくなり、11月には遂にドイツ精神界の帝王たるヘーゲル教授の命をも一夜にして奪い去った。この不意打的な頓死をば、まだ23歳の哲学生だった D. F. シュトラウス（後年ニーチェによって一方的に「教養ある俗物」なるレッテルを貼られた宗教哲学者）は故郷の友への手紙で驚愕しつつ詳しく伝えている⁽⁴⁾。かかるパニックの中で、剛毅精励をもって鳴る王立植物園副園長シャミソー博士も、齢50ともなれば大革命いらいの波瀾

万丈の人生を顧みて、ある感慨にとられる瞬間もあったであろう。

去年の母国での7月革命はドイツの青年たちにも再び言論の自由への希求へと立ち上らせるだろうから、自分もフランスの先輩ベランジェ（1780—1857）のような痛快な平民的政治詩で彼らを鼓舞してやりたいものだ。去年ハンブルグで会った天才ハイネ君の成功作「歌の本」の側面掩護のつもりで、ベランジェ氏のシャンソンの訳にでも手を染めてみようか。

だが、あの対フランス解放戦争に参加するのを拒まれた時の二重国籍人的分裂の苦しさはひどかった。その苦悶を辛うじて慰めてくれた親友の幼なかつた娘が今わが妻となって優しくかしずき、三男二女を産んでくれ、今の家庭的倖せはこの上ないものだ。

ロシアの探検船での北太平洋と南洋諸島の周航の3年は苦しくもあり凄絶な冒険も少なくなかつたが、精神的にも肉体的にも友情関係においても無比の収穫の時だったし、そのうえ学術報告によって学会にいささかの貢献をなしたと信ずる。

1827年、最後に故国シャンパーニュの父祖の城を訪れた自分は、既にとり壊されて一面の田畑となった跡地に立って、ただ暎のうらに獅子の紋章やスフィンクス像の佇む噴水、古武具のつまった墓所を思い出して涙するしかなかったが、それでも今はドイツ人として己れの Identität を確立した自分は、追憶の詩“Schloss Boncourt, ボンクール城”の末尾にその地の新しい豊饒を祝福しつつ、また未来の詩人として自らの決意を誓うこともできたのだった。

So stehst du, o Schloß meiner Väter,
 Mir treu und fest in dem Sinn,
 Und bist von der Erde verschwunden,
 Der Pflug geht über dich hin.

Sei fruchtbar, o teurer Boden,
 Ich segne dich mild und gerührt,
 Und segn' ihn zwiefach, wer immer
 Den Pflug nun über dich führt.

Ich aber will auf mich raffén,
 Mein Saitenspiel in der Hand.
 Die Weiten der Erde durchschweifén,
 Und singén von Land zu Land!

かくのごと、わが心のうちには、汝、祖先の城よ、
 いまだ^{いにしえ}古のまま、蔽として立てども、
 この地上に、汝が姿、すでになく、
 その地には、^{すき}鋤の行きかうのみ。

尊きその土地よ、稔り豊かなれ。
 やさしく、心こめて、われ汝を祝福せん。
 そして誰あろうと、その地に鋤はこぶ者に、
 幾重もの祝福をのぞみてやまず。

さはれわれは、いま琴を手に、
 心ふるい起こして、
 この広き世をさすらい行き、
 国々を歌い歩かん。

(中島悠爾氏⁽⁵⁾ 訳)

こうして文芸誌編集と博物標本の整理研究に明け暮れるうち、ふと目についた初期ルネサンスの賢者フランコ・サケッティ Franco Sacchetti (1330年頃—1400年頃) 著「三百物語」の中から傑作な主題を見つけたシャミソーは、いつコレラで横死するかもしれぬ幾許かの不安を詩作によって洒落のめし、余裕のあるところを見せたいと思う。

わしももう歳でな、古い年代記をよく思い出すよ。誰も聞かなくてもいいが、フェラーラでのペスト騒ぎの時の、パッソー老の話をしようか。

誰もがこの疫病にふるえ上って、息子は倒れた父から逃げ出し、母親すら自分の児をすてたもんだ。

暑い夏のこと、友にも親戚にも見捨てられて老人は、もう瀕死の床に伏している。遺言を書かせるべく、

やっと公証人に来てもらって、法的有効書に口述していわく：

「子供らよ、後継ぎの者たちよ、

わが蠅たちに餌をきちんと与えるよう申しつけたぞ。」

「いま臨終だというのに、バツソーさん、

なお冗談とはいただけません、主の御救いと平安をお祈りしなさい。」

「わしの言う通り書くんだぞ、いいかね。見られる如く一族みなから捨てられたこのわしだが、蠅たちは忠実にずっと

ここにいてくれる。利己心からだ、と君は言うだろう、わしは詮議はせん。解ることは唯、彼らが誰よりも

誠があると見えるのだ。誓って言うが、十分思案のうえでのこの遺言じゃ。その謝意として毎年聖ヤコブの日に

樽一杯のいちじくの実を蠅たちに大番ぶるまいしてやることじゃ。もし一度でも怠り忘れたならば、

財産のこらず救貧院ゆきじゃぞ。」

その命のごとく蠅たちは、かの日に決められた馳走にあずかり、子孫は一度も彼ら⁽⁶⁾を忘れることはなかったと。

その後の彼の年表：

- 1833年 4月に王立植物園長に昇任したが、5～6月にかけて重い風邪にとりつかれ、以後たえず病臥。
- 1834年 余命少きを感じて20年前のロシヤ艦による世界一周探検の『日記』を起稿し、
- 1835年 この春に完結⁽⁷⁾。6月アレクサンダー・フォン・フンボルトの推挙でベルリン科学アカデミーの会員となる。
- 1837年 妻の死(37歳)。「ハワイ語辞典」に着手。
- 1838年 「ハワイ語辞典」継続の報告書。6月「ベランジェの歌」を出版。8月4日退職、8月21日気管支拡張症で死亡。

資 料

章Ⅰのテキストは Benjamin, Walter: Deutsche Menschen – Eine Folge von Briefen –, Suhrkamp Taschenbuch 970, 1984.

章Ⅱのテキストは A. v. Chamisso, Sämtliche Werke I & II, Winkler, 1975.

注

- 〈1〉 E. H. アッカクネヒト「パリ病院 1794—1848」館野之男訳、思索社、1978、307頁。
 〈2〉 M, ヴェーバー「プロテスタンチズムの倫理と資本主義の精神」第1章「問題の所在」。「……わけても東プロイセンで、メノナイト派が兵役拒否を固執したにもかかわらず、産業発展のためには欠くことのできぬ担当者であることを理由にして、武断的な国王がこれを黙認した事実……」。河出書房新社：世界の大思想3，ウェーバー，131頁，阿部行蔵訳。
 〈3〉 J. トレーガー「世界史大年表」鈴木主税訳、平凡社、1985、321頁。
 〈4〉 同じ時に同地に住んでいたアルトール・ショーペンハウアーは、夢に現れた亡父の暗示により、即刻ベルリンを逃げ出した。
 〈5〉 NHKドイツ語《歌と詩》，日本放送出版協会，1973，97頁。
 〈6〉 “Das Vermächtnis”，1831年10月の作。
 〈7〉 満3年を越す世界一周から母港クロンシュタットに還り，更に2ヶ月後に遂にロシア海軍勤務から解除されてドイツの港に帰着した時に作った短かい詩を，17年後のいまシャミソーは「日記」の跋として付記した。

遠く異郷よりさすらい人は今帰る，
 魂のいと深くまでゆすぶられて；
 杖を置き膝折りて，おお故国ドイツよ，
 汝が腿をひそかなる涙もて濡らしぬ。
 願わくば愛の代りにわが唯一の
 希求を拒まざれ——命の暮に疲れたる
 老の目の沈むとき，わが憩いの枕たる
 石を汝が土地に見出すことを。

[完]

[旭川医科大学・ドイツ語]